

## 祐徳稻荷神社中川文庫所蔵『如法寺殿道之記』：解題と翻刻

井上，敏幸  
福岡女子大学教授

<https://doi.org/10.15017/10459>

---

出版情報：文献探究. 16, pp.1-10, 1985-09-25. 文献探究の会  
バージョン：  
権利関係：



祐徳稻荷神社 『如法寺殿道之記』  
中川文庫所蔵

解題と翻刻

井上敏幸

解題

一 諸本をめぐって

いまここにとりあげる中川文庫蔵『如法寺殿道之記』は、かつて  
谷山茂氏が、御所蔵の寛政元年宮地仲枝写の一本を紹介され、世に  
知られるようになった。『如法寺殿道之記』(但し谷山氏は「われもか  
う日記」とでも呼ぶべしとされた。初め学燈社、国文学解紙と教材  
の研究。昭和40年12月号に掲載、後に『谷山茂著作集』第六巻所収  
の、元禄初年頃の写本である。簡略に書誌的説明を加えておくと、  
請求番号 1 222 B、大本(20×20)一冊。白色厚紙(昭和初年頃改  
装か、右肩の墨書によるラベルが、その頃の物)の後装表紙。左肩  
に大きく「如法寺殿道之記」と書名を墨書する。料紙楮紙、全十三  
丁。原装は共表紙であつたらしく、第一丁左肩に、現装の外題より  
はやや小さめに「如法寺殿道之記」と墨書する。遊紙一枚があつて、  
本文は墨付十丁。最後の遊紙一枚は、原装の裏表紙にあたる。本文  
半丁各十一行・字高二〇。二種、各行二十から二十三字。内題など  
なく、文末に、本文に続けた形で行を改め、下方に「如法寺」、さ  
らに行を改めて、上方に「もん<sup>まゐ</sup>と殿<sup>まゐ</sup>」とある。蔵書印は、本文  
第一丁右肩に「中川文庫」(朱陽印、69×69)の印がある。いま仮  
に本書を中川本と呼び、翻刻の底本とする。

ちなみに中川文庫には、いま一本の写本が存する。元禄七年、幕  
府の儒員人見竹洞の序文を得て成立したと思われる、鍋島直保編の

一大紀行文集『桑弧』所載本である。『桑弧』は、総目録一巻、お  
よび本文十二巻、(但し各巻にその巻の所収目録を置く)の十三冊  
よりなるものであるが、その第十二巻目の最後より二番目に所収さ  
れている『関東紀行』は、中川本よりの転写本である。以後この写  
本を桑弧本と呼ぶことにする。中川本よりの写しであることは、両  
本を比較した場合、桑弧本の方に、仮名一字の後補、ミセケケなど  
が存することによって知られる。しかしむつと明確にそのことが知  
られるのは、『関東紀行』という題名は、実は直條が、『桑弧』編  
纂時に自ら命名した題名であると推測されるからである。中川本と  
桑弧本との巻末を比べてみれば、  
にかけるは今のためとやいふへし

如法寺

もん<sup>まゐ</sup>と殿<sup>まゐ</sup>

という中川本に対し、桑弧本には、「如法寺」「もん<sup>まゐ</sup>と殿<sup>まゐ</sup>」の  
奥書に相当する部分がない。この両本における相違は直條が本作品  
を『桑弧』に採録するにあつて、奥書の署名「如法寺」を、内題の  
下の著者名に移し、著者がこの道之記を贈った相手である「もん<sup>まゐ</sup>  
と殿<sup>まゐ</sup>」という宛名を省略したために生じたものである。さらに直條は、  
『如法寺殿道之記』なる題名を、恐らく自ら『関東紀行』と改題し、  
『桑弧』の一篇としたために、両本の冒頭部は、内題・署名を持つ  
桑弧本と内題等一切を持たない中川本という極端な相違が現われた  
ものと考えられる。『如法寺殿道之記』という題名を『関東紀行』

に改めたのは、恐らく、『扶桑拾葉集』の編纂方針に従ったもの（『扶桑拾葉集』において、『長明道之記』を『東関紀行』と改めている例等）と思われるが、直條に何らかのためらいがあったらしく、総目録では、巻第十二の末、「関東海道記 中院通村」と「吉野記 飛鳥井雅章」との間に、やや小さめに「関東記行 如法寺」と題名及び作者名が挿入されている。しかし、巻第十二の目録には、そうした記入がなされていない。直條のためらいは、恐らく如法寺という無名の女性作品を採録するか否かにあつたかと思われる。しかし、直條が、この作品を中院通村と飛鳥井雅章の作品との間に置いたことの意味は無視できない。後に詳しく検討するが、直條には如法寺なる女性に関して何らかの情報があつて、この作品の成立時期が近世初頭であることを知つていたと推測せざるをえないからである。

次に、中川本との比較において、谷山本を見てみると、元禄と寛政の時、代差が、そのまま写本にあらわれているといわざるをえない。巻末を比べてみると、

むかしより日記といふことはお  
 とも女も心ある人の書をけるこ  
 とにこそをろかなるくちに書をく  
 べきにあらねどもほんごなりとて  
 は・やりす・たまはるべく・  
 また御まへにてふじの山はいか  
 しみつると御たづねありしかば  
 あきらけきみよの時しるふじの  
 ねやけぶりもなみもそらにきえ  
 ゆく

昔より日記といふ事ハ男も女も  
 心ある人のかきをける事にこそお  
 ろかなるくちに書をくへきにあら  
 ねハほんごなりとて御やりす候  
 て給るへく候  
 又御所にてふしの山ハいかく見  
 つると御尋ありしに  
 あきらけき三代の時しる不二の  
 ねや煙も雲も空にきえつ

けふりの末も一条院の御比まは  
 さたかに見えしといふもあれとち

かき世にしれりといふ人もなしけ  
 に古今の序にかけるは今のためと  
 やいふべし  
 やいふへし

西園寺右大臣之御母  
 如法寺殿作  
 もんと殿  
 まいり  
 如法寺

中川本にあつて、谷山本にない部分（・・・の箇所）は、ほぼ文意をなしていない。谷山本の原本に、激しい虫損ないしは破損があつたものと思われる。また谷山本には、中川本の奥付に相当する署名・宛名がなく、谷山氏の解説によれば、巻末の「西園寺右大臣之御母 如法寺殿作」という部分は、「本文とは別筆の書き入れ」であり、表紙題簽「如法寺殿作西園寺右大臣母」とも、本文とは別筆の書き入れだということである。結局、谷山本には、きちんとした題名が与えられていなかったようである。

最後に『国書解題』に、「如法寺殿紀行釋一卷 京都より江戸に赴くところの和文紀行なり。巻末に『もんだの頭如法寺』と記せし」とあつて、中川本・桑弧本・谷山本とはいま一つ別の一本が伝存していたことが知られる。但し谷山氏同様筆者も未見である。『国書解題』の書名が、どのように書きつけられていたか、今知りえないのであるが、巻末に「もんだの頭如法寺」とあるという点が気にかかると、中川本の巻末に対応させて見れば、「もんだの頭」は「もんだ殿」の部分であり、「如法寺」の部分には、あるいは中川本同様、少し下に記されていたのかも知れない。

以上、中川本と谷山本・国書解題本（但し未見）とを比較してみたが、この三本は、結局、同一祖本より、中川本は元禄初めごろ、谷山本は寛政元年、国書解題本は少なくとも谷山本以前（巻末の署名が存在していた頃）に、それぞれ別箇に写されたものだったと推

測される。とすれば、本作品の書名は、現在のところ最善本である中川本の外題「如法寺殿道之記」と定め、他に「関東紀(記)行」「如法寺殿紀行」といった題名でも呼ばれていたとするのが最も妥当であるということになろう。

## 二. 成立時期の推定

『如法寺殿道之記』の谷山本紹介の解題において、谷山茂氏は、本作品の成立時期を、「ひとまず嘉元四年(一三〇六)九月としたことも、全くの仮説であつて、なお後考を俟たねばならない。しかし、いくら時代が下つても、おそらく江戸期までは下らず、室町期以前ということにはなるであろう」と結論された。氏の推定の根拠となつたものは次の二点である。第一は、本作品が色濃く『十六夜日記』の影響を受けていることから、同日記中の歌の成立年以降、すなわち弘安二年(一七九一)十月二十五日以降であること。第二は、本作品の九月十三日の記事、

十五夜のいとくまなかりし事院の御事など思ひ出る人／＼いかに  
おほからん涼闇の御袖も今宵はくもりてやなかめおはしますらん  
云々

の部分より、「十五夜一院の御事一涼闇」とあることを争がかりとして、弘安以後で、秋十五日に崩御された天皇(上皇)または固母をさぐつてみると、それは嘉元三年(一三〇五)九月十五日崩御の龜山院しかない」という点である。ただし、この第二の根拠に対し自ら、疑問を出されている。その疑問の第一は、「てらしつる半の秋」、つまり『仲秋八月の意』が、「九月崩御の龜山院の場合には当てはまらない」とことについてである。嘉元三年が閏十二月を含む故に、知歌的表現として九月を「半の秋」と受けとめることも、許されるのではあるまいかとされ、また、嘉元三年九月十五夜が果

して「くまなかりし」月明であつたかどうかについても、十七日の雨を確認された上で、「十五日頃から降りつづけた長雨ではないとすれば問題はない」とされている。いま一つの疑問点について谷山氏は、解題の中で、「どうしたことから、鎌倉には入らないで(あるいは素通りにして)、大磯あたりから直ちに「ほどがいの里」に到り、九月二十日には武蔵野の露を分けている」と述べられている。

以上の谷山説に対し、筆者も同じような手續きを踏まえつつ、本作品の近世初期成立説を以下に述べてみたい。少なくとも室町期以前の作品とされる谷山説に対し、筆者は、第一章「諸本をめぐつて」においてすでに述べたごとく鍋島直條の手になる『桑弧』の配列順より見て、まず、近世初期の作品ではないかという疑問を提出したい。作者如法寺を直條が、中院通村と飛鳥井雅章の中間に生きた女性と思つていたとすれば、時代は少なくとも通村の生年、天正十六年(一五八八)、一説に天正十五年(一五八七)と雅章の没年延宝七年(一六七九)の間でなければなるまい。作品成立の時期に絞つてみれば、『関東海道記』の元知八年(一六二二)以降、『吉野記』の承応三年(一六五四)(島原素雄氏の推定による)以前という具合になる。但し、どこまで正確に直條がこうした年次を把握していたかについては当然のことながら問題は残るであろう。したがつて、少しく幅を持たせて、慶長・元知頃より『吉野記』成立の頃までを一応の目安として、以下を考えていくことにする。

まず、本作品を読んで直感的に感じられるのは、谷山氏の疑問点の二つ目、「どうしたことか、鎌倉には入らないで」、大磯・ほどがいの里を通り、武蔵野に入つていふという点である。これは、谷山氏が、本作品を鎌倉時代のものと同提してしまつた結果の読みから生じた疑問だつたように思われる。近世文学を専攻している筆者には、むしろ、東海道、それも、慶長六年に指定された以降の宿駅

名でもって本作品が一貫したものとなつてゐることが、直ちに感得されるのである。中世期と呼称を異にし、近世に入つてどうした宿駅名で呼ばれるようになった宿駅ニ・三を検討してみることにする。九月九・十日の記事は「ミナ口とかやいふにとまる十日ミナ口を出て龜山と定めつれとさほる事ありて行つかす（中略）今夜ハ土山にとまる」とあるが、この「ミナ口」水口と土山の地名は、ともに、応永三十一年（一四二四）の『伊勢参宮記』以降に見られるもので、鎌倉期には、『海道記』に知られるように、水口は「大岳おが」と呼ばれていたのである（角川書店『日本地名大辞典』25滋賀県昭知54年刊）。

九月十三日の宿泊地「大いハレ」の場合は、慶長の宿駅指定（一六〇六）より寛永二十年（一六四三）迄、本宿を勤めていたが、大岩宿疲弊のため正保元年（一六四四）に、加宿に改められてゐる（平凡社『日本歴史地名大系』23愛知県の名昭知56年11月刊）。文字通り解すれば、本作品は、この間の作品ということになるが、加宿大岩村が、その後宿場としての機能を全く停止したかどうか、筆者には分らない。したがつて現在のところ断定はできないが、本作品成立の下限が、少なくともこうした制度の変遷を知ることによつて推測の余地がかりをうることは有難い。

九月十九日の「今よひハほとかひの里とやらんにと、まらんといふ」の「ほとかひの里」が、慶長六年の宿駅制定によつて定つた保土ヶ谷宿であることは疑う余地はない。文明十八年（一四八六）の『廻国雜記』には「かたばら（帷子）の宿」と呼ばれており、近世に入つて作られた紀行作品にもこの呼称は散見する。しかし、逆に近世以前の作品に「保土ヶ谷」の宿名は出てこない。ちなみに「保土ヶ谷」の地名は、戦国期の文書類に初めて見えるとの指摘（明応三年（一四九四）米良文書『日本地名大辞典』4神奈川県昭知59年

6月・天文十一年（一五四二）小田原叢所領役帳『日本歴史地名大系』4神奈川県の地名昭知59年2月刊）がなされている。

以上、本作品の宿駅名が近世の東海道を思わせるものであることを検討してきたが、いわゆる名所歌枕においても、近世的と見られる叙述がある。例えば、九月十三日の八橋について、

八橋はいつくそとへは道香かのかたハラなり今ハよきてとをらすといふ

と記している部分である。中世期に、八橋が、いわゆる鎌倉街道の宿駅として栄えていたことは説明するまでもあるまい。室町末期から戦国時代にかけて名所八橋が杜若もなく荒廃していたことも諸々の紀行作品に明らかである。近世に入つて東海道が制定された以降の八橋は、「東海道岡崎宿（現岡崎市）から池鯉鮒宿へ至る中間から一里ばかり北方に位置する」（平凡社『日本歴史地名大系』23愛知県の地名昭知56年11月刊）ことになる。本作品の叙述、「道香かのかたハラなり、今ハよきてとをらす」とは、まさに近世の東海道と八橋の地理的關係を説明したものに他ならなかつたのである。

続いて、谷山氏が、嘉元四年九月成立説の根拠とされた問題を検討してみると、第一点である『十六夜日記』からの強い影響は、筆者も十全に認める。しかし、影響が強いことと、時代が近いこととは無関係である。近世初頭の女性が、京都より関東への旅を紀行作品にまとめようとする時、『十六夜日記』が強く意識されたとして何の不思議もない。元禄期の芭蕉作品に端的に示されているように近世の紀行作品で、『十六夜日記』の影響を受けたものは大変多いといつて誤らないのである。

次に嘉元四年九月成立説の直接的根拠とされた、九月十三日の条の記事と嘉元三年九月十五日崩御の龜山院との關係、つまり「十五夜一院の御事一諒聞」についての谷山氏の説明は、いかにも苦しい

感じをまぬがれない。

十五夜のいとくまなかりし事院の御事など思ひ出る人／＼いかに  
おほからん涼闇の御袖も今宵ハくもりてやなかもおはしますすらん  
なとかけまくもかたしけなき大内山の御事までおもひやり奉るに  
なかむる月さへやかて影くもる心ちすれは

照しつる半の秋を思ひ出て今宵ハくもる月の影かな

谷山氏は、「照しつる半の秋」の歌を引いて、「『半の秋』が単なる  
文飾でないとするれば、それはもちろん仲秋八月の意である。とす  
れば、それは九月崩御の龜山院の場合には当てはまらない。ところが、  
たまたま嘉元三年は閏十二月を含み、年間十三ヶ月にわたつて  
いるので、龜山院崩御の九月を『半の秋』と受けとめることも、季  
節感的には当然であろう」とこの一文を解されている。そしてこの  
九月十三日は、「故龜山院の期年の満ちる直前」とされている。十  
五夜」を、龜山院の崩御の日九月十五日に重ねた読みをされている  
所に苦しい解釈が生じているように思われる。本文は、九月十三夜  
の月を見て、八月十五日仲秋の名月を思ひ出したのであり、その仲  
秋の折の院の事、さらに、その後崩御された院をいたんどの文章  
だったのであるまいか。「期年の満ちる直前」まで時間がたつて  
いては、やや文章に迫力を欠くといふべきである。こうした状況に  
見合つた、近世初期慶長より寛永末年迄の間の天皇或は上皇に、元  
和三年（一六一七）八月二十六日に崩御された後陽成院がいる。扶  
桑拾葉集』所載の数篇の追悼文の中で最も詳しい叙述を持つのは、  
平時慶の「後陽成天皇升遐の記」であるが、関連部分のみ抜き出  
してみれば、崩御の様子は、

元和巳年、文月のすまつかたより、上皇例ならずまし／＼ける。

（中略）八月十五夜は清光なりといへとも、上下心をつくす折ぶ  
しなれば、さすが誰も心にかげながら、打ながめてやみぬ。下の

六日の曉、御こゝち今ほと覺されしに、（中略）下宮御手を繪り  
て御氣色をうかゞひ奉るに、やゝしばらくありてねぶりまします  
やうにして、する／＼と引入せ給ひぬ、御とし四十七歳の秋の露  
と、消給はんこと思ひよらする事なり。（中略）さて御葬禮の事  
は日えりして、来る廿日と聞ゆ。（下略）

とある。「升遐の記」の傍線部「八月十五夜は清光なりといへとも、  
上下心をつくす折なれば、さすが誰も心にかげながら、打ながめて  
やみぬ」と、本作品の九月十三日の条の、「十五夜のいとくまな  
かりしこと院の御事など思ひ出る人／＼いかにおほからん」とを重ね  
あわせてみれば、作者のみならず、いかに多くの人々が諒闇の袖に  
涙したかを想像することは容易であろう。しかも、九月十三日には、  
まだ、御葬禮も済んではいなかったからである。筆者は、この後陽  
成院の崩御を、この作品の九月十三日の条の「院の御事」に当てた  
いと考える。従つて、本作品の成立時期は、元和三年（一六一七）  
九月末の頃と推測されるわけである。

### 三、余説——結びにかえて——

作者如法寺が如何なる女性であつたか、また、冒頭旅立ちの部分  
に、なぜ実在しない西園寺内大臣公実卿の名前が記されたのか、谷  
山氏同様一向に手がかりもつかめないが、九月八日の夕に京都を出  
発し、やや急ぐ形で、九月二十日に江戸へ着いているのは、やはり、  
如法寺が、後陽成院の崩御にともなう何らかの役目を持つて、江戸  
に向いたのではないかと思われてしかたがない。以上は筆者の全  
くの推測に過ぎないのではあるが、女性の遊山の旅であつたならば  
決してこうした時期に旅立つことはあるまいと思われる一事がある。  
それは、本作品、九月十二日の条の記事、

都出しよひの野分にたふれ伏すと、まるへきやもなし薄にてかり

ふける庵にさながら舟を枕にて露いとさむしみなれかほにてさし入たる月さへ旅こちす

に知られる「野分」のことである。池鯉鮒近在は、九月八日の台風にかかりの被害を便けていたらしい。「日本群書類史料」(氣象研究所・昭和39年3月刊)には、残念ながら三河地方についての記録は見い出せないが、京都については次のような記録がある。

元和三年九月七日己巳雨天。(中略)入夜大雨、亥刻大風壁吹倒事、家々屋ね吹マクリ、又ハフナト吹落、洛中鳴動不斜候(土御門恭親御記)

この京都を襲った台風が、翌朝三河地方を通過したと考えてよいのではあるまいか。とすれば、如法寺は、台風の通過直後に、京都を出発していることになる。遊山を目的とした女性の旅立ちにはあまりにも似つかわしくないものというべきであろう。九月二十日迄に江戸に着かねばならない用件を持っていたが故の旅立ちだったと推測したい。とすれば、九月二十日の条に続く巻末の記事と知歌、

又御所(前ノ誤リ)にてふしの山ハいか、見つると御尋ありしに  
あきらけき三代の時しる不二のねや煙も雲も空にきえつ、

も、何らかの役目を無事終えた作者の姿が想像されてくる。「御前」とは誰れの前なのか、また、「三代の時しる」とは、文字通り三代目の時代をいうのであろうか。江戸において「御前」といい「三代」といえば、将軍家以外には考えられないであろう。以上、想像に想像をかさねる結果となつてしまつたが、作者如法寺を探る何らかの手懸りを得るきっかけの一つにはなりうるのではあるまいか。

最後に、鎌倉時代の紀行文の問題について一言触れておきたい。最近刊の『日本古典文学大辞典』(岩波書店昭和59年1月刊)「紀行」の項にも、この期の作品の一つとして、しかも「如法寺殿紀行」の題名で本作品が採りあげられていることが気になる。確かにその

項では括弧付で「作者等に不明な点はあるが」と断り書が添えられてはいる。しかし、谷山氏の紹介以来、本作品が鎌倉期の作品として文学史上、常識化しようとしていることは間違いない。筆者には、こうした形での常識化がこわいのである。

また、本作品名が、「如法寺殿紀行」という題名でもつて一般化すること、あたかも鎌倉期に、すでに「紀行」なる語が、紀行文学という文学ジャンルのはしめとなつてきたかの如き錯覚を起させることについてである。「ブリタニカ国際大百科事典」(昭和49年1月刊)「紀行文」の項には、「鎌倉時代に入ると、京都・鎌倉間の交通が盛んになるとともに、東海道や新都鎌倉の見聞記が駢麗体などの特殊な文体をもち、和歌をも挿入した新形式として成立し、紀行という語を独立させるにいたつたとある。そしてその作品例には『東関紀行』が引かれている。しかしこの『東関紀行』の名称は、『扶桑拾葉集』編纂時点において始めて命名されたものであつて、それ迄は全て『長明道之記』と呼ばれていたことを我々は思い起こすべきである。「如法寺殿紀行」が、鎌倉時代の「紀行」ということで紹介された(谷山氏は「われもかう日記」と呼びたいとされたが)ために、「ブリタニカ」の「紀行」という語を独立させるにいたつた」という記述を、暗々裏に導き出していたともいえるからである。しかし、事実は、寛政の写本において「如法寺殿紀行」と呼ばれたのであつて、直條が元禄に編纂した「桑弧」において「関東紀行」と命名する以前の題名は、「如法寺殿道之記」だったのである。私は、「紀行」という語が独立して紀行文をさす語となりえた時代は、まさに『扶桑拾葉集』「桑弧」が編纂された元禄時代前後ではなかつたかと考えている。小さな無名の女性の作品が、大きく文学史の認識を誤らせていることになるのではあるまいか。この解説と翻刻とは、そうした認識を正しく改めんがためのものである。

ることを諒解いただければ幸いである。

注 島原泰雄「芳野紀行」影印・翻刻・校異・解説―（『国文学研究資料館紀要』第七号、昭和56年3月）

昭和六十年七月二十日の古典談話会の席上、同趣の談話をさせて頂いたが、その折、今井源衛先生その他諸先輩方に有益な御教示を頂いた。一つ一つ注記することは省略させて頂いたが、改めて深甚の謝意を表するものである。また、調査・翻刻を御許し頂いた祐徳神社司宮鍋島純氏、直接御世話頂いた島江邦彦氏に對し、衷心より御礼申しあげる。

### 翻刻

#### 凡例

- 一 底本には、中川文庫蔵『如法寺殿道之記』を用いた。
- 一 対校本には、『桑弧』所収『関東紀行』および谷山茂氏の翻刻本（『谷山茂著作集』第六卷所収）を用い、それぞれ「桑本」「谷本」の略称を用いた。
- 一 底本の翻刻に当っては、漢字・平仮名・片仮名、踊字など、出来る限り、原本通りとし、句読点また濁点等も私に施さなかつた。丁移りは、上・下で示した。
- 一 対校に当っては、仮名・漢字の違い、また単なる用字の違いについては省略し、文章の異なる部分についてのみ本文上段に注記した。
- 一 『桑本』の第一丁第一行目の内題と作者名「関東紀行 如法寺」の部分ば、翻刻では省略した。

1 谷本「何となくナシ」

2 谷本「し」

3 谷本「こよ」

4 谷本「んく」

5 谷本「ぼ」

6 谷本「各」

7 谷本「各」

8 谷本「各」

9 谷本「いどく」

10 谷本「御方」

11 谷本「にま」

12 谷本「中持」

13 谷本「き」

14 谷本「あら」

15 谷本「桑本」

16 谷本「桑本」

17 谷本「桑本」

18 谷本「桑本」

19 谷本「桑本」

20 谷本「桑本」

21 谷本「桑本」

22 谷本「桑本」

23 谷本「桑本」

24 谷本「桑本」

25 谷本「桑本」

### 如法寺殿道之記

表紙

すむべき國もとむるにハあらねとも何となく身をえうなき物になし果て比ハ長月夕つくよのおかしきかけにさそハれ出なるとも思ひなりぬるしたハしけなる人／＼の袖のしづくもなくさめかねつれととかくいひこしらへつれなくふりすつるやうなるもいと哀に心ほそく猶余波かちなる心ちしてえ行やらねハ今<sup>3</sup>夜ハ逢坂にとまらんといふこれかれしたひ来し人／＼<sup>4</sup>別れたかくしけれとさのミもいか／＼ハとて清水のあるほとりにて各立別ぬ相坂を人たのめなる名にこそなといひし昔の人の心まで思ひしらす別れををくりてなと作れる詩の心をおもひは出てしたふ人も有り京へふミ書へき方ハあまた有ぬへけれどくるしけれは西園寺内大臣公実卿の御姉あまきみの御方斗<sup>12</sup>に中将わかきみのいと覺束なさはく／＼ミおほせなとこま／＼と書ておくに

思ひやれ子をおもふ田鶴の飛別れ雲のよそにまとふ心をとそいひやりける

八日の月いと程なく梧の木の間より来り来てめつらかにおほ中山風あらかに吹払ひ今宵へあかしかねいとわひしければまして末とをき旅ねおしはからる

逢坂やせきのあらしを片敷てゆくふしらる／＼東ちの空<sup>14</sup>九日また霧いとくらきほとにおき出て矢早瀬のわたたり舟にのるへき所へ行いと心ほそしせうとの親も旅の出立見んとてのるへき所迄したひ来にけりこれよりいなんとするもいと名残かち也かへる浪もうらやましく都へたどる心ちすれとしほ海ならねハかひなし舟人いとき竿取など



ワ桑名ハ後  
二神記ニ  
18谷本「いさ  
あさず」  
19谷本「都  
みぬり」  
20谷本「舟より  
みぬり」  
21谷本「さ」  
22谷本「る」  
23谷本「ふすま

24谷本「に」  
25谷本「より  
いでい」  
26谷本「まご  
の山」  
27谷本「きと  
28谷本「よひ  
にしがま

29谷本「いぶ  
にしがま  
30谷本「やま  
31谷本「ま  
32谷本「と  
ナシ

33谷本「ま  
34谷本「へ  
35谷本「う  
36谷本「見え  
37谷本「か  
38谷本「し  
39谷本「に  
40谷本「と

41谷本「濱  
42谷本「

すれハほとなく湖の海朝霧立隔て跡も見えず成ぬるもい  
と悲し舟よりそこともしらぬ里を行三井の寺もいとを  
く成鏡の山ハ霧こめていと香に憐たに見えず三上の山の  
こなたに少高き山あり峯に梢の茂りたる中よりおほつか  
なき程に鐘の聲きこゆるハ寺ありやと人にとへハいはね  
といふ古寺ありといふを討きつて

夕霧に入あひのかねの聲なくハたれかいはねの毒のふ  
る寺其夜ハミな口とかやいふにとまる十日ミな口を出  
て絶山と定めつれとさはる事ありて行つかす朝またきよ  
り女郎花おほかる野へを分ゆくまつち山ともいはまほし  
き今夜ハ工山にとまる

十一日土山を出て尾花が末を分行鈴鹿河八十瀬ハ今もか  
はらぬ流れありかたしいせ迄たれかなと化なるふること  
共思ひ出てわたる今夜ハ桑名といふ所にとまる宿のあ  
るし相知たるひとのゆかりにていとねん比にいたつきけ  
り

十二日いとよく晴たり桑名をまた明仄の程に舟にのりて  
きいつこれやうき世をうみわたると見えて舟とも多く有  
追風さへそひて舟ハ行ともおもほえぬに熱田の宮へつく  
道いとわろし御社にまうて、拜ミ奉るに誠にかミすひ松  
もいく代経ぬらんと見え神司のものともこゝかしこしは  
ふきしたるかほまて此神彼神となりのりいふもいとゆか  
しくとはまほしき事ハあれと急ぐ道なれハ過行硯とり出  
て鳥めのそばなる松の枝に書つく

いか斗神も心やすますらん姿ふく風に濤のよるく汐  
干のほとにてひかたをゆくいと面白し心あらん友もかな  
と都恋しうおほゆるに濱午鳥多く先立て友よひかハすも

43谷本「自  
44谷本「か  
45谷本「か  
46谷本「は  
47谷本「今  
48谷本「平  
49谷本「な  
50谷本「し

51谷本「か  
52谷本「し  
53谷本「し  
54谷本「ま  
55谷本「ま  
56谷本「ま  
57谷本「ま  
58谷本「ま

59谷本「ま  
60谷本「ま  
61谷本「ま  
62谷本「ま  
63谷本「ま  
64谷本「ま  
65谷本「ま

66谷本「ま  
67谷本「ま  
68谷本「ま  
69谷本「ま  
70谷本「ま  
71谷本「ま  
72谷本「ま

73谷本「ま  
74谷本「ま  
75谷本「ま

いとくうらやましく白波のよする渚に海士の討しほやく  
などあはれなるいとなみ思ひくらへらるこゝを鳴海の浦  
といへは  
いかに又我身のすふもなるみかたあまのしほやくなけ  
まのミカは人をうつミのなといふ所を行もいとおそろし  
く今日ハ美河の園池鯉鮒の里といふ所にとまる皆秋の  
野らにてまれにある家ハ都出しよひの野分になふれ伏て  
とまるへきやもなし薄にてかりふける庵にさなから出  
を枕にて露いとさむしみなれかほにてさし入たる月さへ  
旅こちす

さく露もちりふの里の殊風にやとりかねたる月のかげ  
哉  
十三日池鯉鮒を出てまたあけくれのほとに行道もミエす  
しるへかほなる松虫の聲く旅なるをうれふかと涙もよ  
ほし哀なりハ橋ハいつくどとへは道香かのかたハラな  
り今ハよきてとをらすといふあさまの嶺の煙の末もゆか  
しけれと遠近の雲のミかりて見えす今夜ハ大いハとい  
ふ所にとまる誠に岩高く山にかたかけたる野にて人の  
家も稀也むねくしからす芦ふけるかいやにとまる  
門田も程なくいねかるなといふ葉もめつらか也人氣もし  
らぬむしの聲く引板におとろく牡鹿の聲更行まにと  
りあつめたる哀いはん方なし月いとさやかにさし出たる  
隣によね哥うたふいと目もあハす思出るに今夜ハ十  
三夜なりけり都いと恋しくミつから篋をひらきし唐の人  
の心迄思知る十五夜のいとくまなかりし事院の御事  
など思ひ出る人くいかにおほからん涼闇の御袖も今宵  
ハくもりてやなかめおハしますらんとかけまくもかた

いかに又我身のすふもなるみかたあまのしほやくなけ  
まのミカは人をうつミのなといふ所を行もいとおそろし  
く今日ハ美河の園池鯉鮒の里といふ所にとまる皆秋の  
野らにてまれにある家ハ都出しよひの野分になふれ伏て  
とまるへきやもなし薄にてかりふける庵にさなから出  
を枕にて露いとさむしみなれかほにてさし入たる月さへ  
旅こちす

66 谷本「やがて」  
ナシ

67 谷本「三つ」  
68 谷本「いへ」  
69 谷本「たち」  
入くもし

70 谷本「とかや」  
71 谷本「初時  
雨か」と  
72 谷本「ほし」  
73 谷本「ほし」  
げかりし  
外森本谷本  
共ニ「枝」  
74 谷本「まむ」  
75 谷本「けに」  
もと

76 谷本「まむ」  
77 谷本「まむ」  
78 谷本「まむ」  
79 谷本「まむ」  
80 谷本「まむ」  
81 谷本「まむ」  
82 谷本「まむ」  
83 谷本「まむ」  
84 谷本「まむ」  
85 谷本「まむ」  
86 谷本「まむ」

87 谷本「まむ」  
88 谷本「まむ」  
89 谷本「まむ」  
90 谷本「まむ」  
91 谷本「まむ」  
92 谷本「まむ」  
93 谷本「まむ」  
94 谷本「まむ」  
95 谷本「まむ」  
96 谷本「まむ」  
97 谷本「まむ」  
98 谷本「まむ」  
99 谷本「まむ」  
100 谷本「まむ」  
101 谷本「まむ」

しげなき大内山の御事までおもひやり奉るになかむる月  
さへやかて影くもる心ちすれば

照しつる半の袂を思ひ出て今宵八くもる月の影かな  
都人おもひも出や東ちに袂も末野の月を見るやと物

かく斗袖ハぬれしを男鹿なくすその草の枕ならすは  
十四日おほいほを出て今夜ハとをつあふミ見付の里にと  
まる富士をミつけの里といへと立いつる雲の重りて見  
えす

遠近の八重たつ雲しふかけれハ不二を見つけの里のか  
ひなし  
十五日見付を出てにしさかといふを過るほとより降出て  
初時雨と思ひしかとさやの中山こゆるほといとふりくら  
せはやとりもとらまほし

都を八萩のうハ葉に見し秋の時雨ふる也冠さやの中山  
行くらす色にこそ有けれタしくれ今夜ハ越しさやの中  
山

西行かむかしを思ひ出らる木末をならへたる左右の峯の  
つゞきいとおもしろし異山に似すといひし人の詞けにも  
おもひしらる今日ハふりそめつと思ふ時雨のいつの間  
に露の染けるにやと思ふハかりむら／＼紅葉も色付渡り  
たるを過かてにやすらふいとわつらひ有と聞し大井河も  
さハリなくわたり香かなる原を行今宵は藤枝といふま  
やにとまる

十六日ふち枝を出てあさ河あまた渡りいとおもしろき知  
國への里さうち過く行て宇津の山にかゝる程折知かほ  
なる時雨さへうちよく涙に袖の色をこかるなと讀し  
人の哀も思ひしらる見し心ちする人にたに行あハねハ都

96 谷本「三つ」  
97 谷本「楓」  
98 谷本「く」

99 谷本「まむ」  
100 谷本「まむ」  
101 谷本「まむ」

102 谷本「まむ」  
103 谷本「まむ」  
104 谷本「まむ」

105 谷本「まむ」  
106 谷本「まむ」  
107 谷本「まむ」

108 谷本「まむ」  
109 谷本「まむ」  
110 谷本「まむ」

111 谷本「まむ」  
112 谷本「まむ」  
113 谷本「まむ」

114 谷本「まむ」  
115 谷本「まむ」  
116 谷本「まむ」

117 谷本「まむ」  
118 谷本「まむ」  
119 谷本「まむ」

にかくとつけやらんよすかもなくいと哀に心細し  
忘れてハ夢かたとたるとるうつの山うつにこゆる蕨のほ  
ろミち分入まに遠近の山いとおもしろし誠に楓いと  
けしこと山ハいまた秋の色も深からず氣色ハかりなるに  
いとそめましけるも哀なれば

行人のなみた休むるうつの山よそにハうすき嶺のそみ  
ちは越果て今夜ハゆめの瀧につくへしと云けれと波にい  
さよふ月影もゆかりしていま夕日を冠残して清見か閑  
にとまるもゆくりなき心ちす

えそ過ぬつきや閑もる清見かた袖こそ波に影をやとし  
て波たつ枕にさはく心ちするに  
おもひきやよめに聞こし清見かた岩こそ波のかゝる枕  
は独めをさまし起出て詠やるに田子の浦迄見たさる  
所なり海士も釣せんとやこき出るけしきなるかいと風あ  
れて波たかければ月にやすらふ心ちしていとおかし  
田子のうらや打出る浪の高けれ八月にいさよふあまの  
釣ふね

十七日清見寺のかねもまた閑残したるほとにて立出る  
いつよりも物かなし明行まに見れハくろき岩に白き衣  
をうちきするやうによせてハ歸る波のぬれ衣ひるよしも  
なき恨もしられたたならす磯におり立浦人とも何事に  
かあらんのしりて浪につきて海にいりまたよする浪に  
ハうしろさまへ立かへるいかなる事するにかと人にとへ  
ハ海士のうきもかる也といふを聞て

沖つ風あら磯なみに浮もかるあまの袖たにかくやぬれ  
けるこを沖つの浦といふ也波いと高し富士の山を見れ  
ハ雪いと高してかくすへき雲もおよはぬにやいとよく晴

102 谷本「り」  
103 谷本「あま」

104 谷本「も」  
105 谷本「は」

106 谷本「み」  
107 谷本「く」  
108 谷本「か」  
109 谷本「日」

110 谷本「も」

111 谷本「し」

112 谷本「あ」  
113 谷本「き」

たる雲ハ替をのミとめくる

いく秋の時雨の雲ハめくれとも山ハときほの富士  
しら雪うき嶋か原も過て今宵は伊豆の三嶋にやとる水  
なかれもいとときよくひきて軒はの山も紅葉して嵐にた  
へぬ木々のこの葉は枕の上にミたれ敷つにしきをしけ  
る心ちす

今宵こそ紅葉の錦きたえの草の枕も旅ならぬかな

十八日みしまを出てゆく浅茅色つき小笠かハラも玉をし  
けるかとまで露の光も見すくしかたけなるにむしの音ハ  
あさなく聞しにハる心ちしてなきからしたる秋の月  
敷もしられて哀深し箱ねちにかゝるほとあけぬとて野邊  
より山にかへる鹿の聲い初とえんなり

明わたる箱ねの山の替より梢にかへるさほしかのこま  
や深く入まゝに立まレリたるときは木ともの中より染  
出したる錦を引廻したるかと思ゆる紅葉いはん方なし行  
やらすゝろに見るもいふしなけれは過行

分入しふものと野へを思レハ化なりけりな顔の紅葉  
とひとりちつゝなんきしよりハたいらかに山もこえ  
果てゆさかを下りて塩木なかる早河も過ぬいとほるか  
に見わたさるゝ海つら雲も山も見えすめさむる心ちする  
今日ハさかみの園小田原と対いふにとまらる浦風あらま  
しく松のひきも時雨にまかふ舎なり

十九日小田原を出て大磯の宿といふを過るうら浪いと閑  
に浮て釣する海士のうけなハも波にたゆたふいとくるし  
けなり洲崎にたてる鶴のすかたも白波にまかふおかし水  
鳥ともの日影にあそふも心上げなり今よひハほとかひの  
里とやらんにとまらんとといふ喜かゝる程にかや屋のひ

113 谷本「に」  
114 谷本「ら」

115 谷本「日」  
116 谷本「月」  
117 谷本「し」  
118 谷本「い」  
119 谷本「す」  
120 谷本「分」  
121 谷本「後」  
122 補記

123 谷本「と」  
124 谷本「し」  
125 谷本「候」  
126 谷本「候」  
127 谷本「前」  
128 谷本「ま」  
129 谷本「し」  
130 谷本「か」  
131 谷本「ゆ」  
132 谷本「け」  
133 谷本「ま」  
134 谷本「ま」  
135 谷本「ま」  
136 谷本「ま」  
137 谷本「ま」  
138 谷本「ま」  
139 谷本「ま」  
140 谷本「ま」  
141 谷本「ま」  
142 谷本「ま」  
143 谷本「ま」  
144 谷本「ま」  
145 谷本「ま」  
146 谷本「ま」  
147 谷本「ま」  
148 谷本「ま」  
149 谷本「ま」  
150 谷本「ま」  
151 谷本「ま」  
152 谷本「ま」  
153 谷本「ま」  
154 谷本「ま」  
155 谷本「ま」

とつたつある所にやとる真里はちかゝらぬかと思へは  
すすか里とをからぬかや夜うつきぬたの音も夜もすから  
目さむる程にきこ中晩近き月も枕にさし入たるいとな  
れかほ也

旅衣かたしく露の夕へより袖にしたしき月のかけかな  
廿日あまりの月のくまなきを明ぬとまかへ供なる人鳥の  
ねもまたすおきさハくいとおかし明行ほとに見れば野原  
の露もわきこしよりハ猶ふかき心ちすむさしのとといふ  
なる草くの中より色もなつかしけなる花のいと匂ふ  
かきかミゆるをめなれぬすかたなり野守にとへハかしら  
をふりてしらすといふいかななるゆかりと尋きかまほし  
きに霜かれに見しなとよめる人のありし初むさし野とい  
へはふと思ひ出て

武蔵のにありとハ聞レわれもかう匂ふハ名のる心ちこ  
そすれ昔より日記といふ事ハ男も女も必ある人のかきを  
ける事にこそおろかなるくちに書をくへきにあらねハほ  
んこなりとて御やりす候て給るへく候  
又御所にてふしの山ハいかゝ見つると御尋ありしに  
あきらけき三代の時しる不ニのねや煙も雲も空にきえ  
つゝけふりの末も一条院の御比まはさたかに見えしと  
いふもあれとちかき初世にしれりといふ人もなしけに古  
今の序にかけるは今のためとやいふへし

もんんと殿

(五行分余白)  
(白紙)

如法寺

福岡女子大学教授